

現代日本の住宅設計論における対照的な空間構想にみる非均質的な空間認識 Non-Homogenous Spatial Image through Contrasting Spaces In Design Theories

奥山研究室 14M17130 新宮 光善 (SHINGU, Mitsuyoshi)

1. 序

L. カーンが提示したサーヴドスペースとサーヴァントスペースのように、建築家は対照的な性格の空間を構想し、言語化することがある。そこでは対照性に関する差異の水準と対照性を用いる根拠を読取ることができる。これはミースのファンズワース邸のような一義的な性格の空間とは異なり、空間の相互関係において異なる空間の質をうみだそうとする建築家の非均質的な空間認識を示す重要な思考と考えられる。そこで本研究では、建築家の対照的な空間構想を述べている住宅作品の設計論を資料¹⁾²⁾³⁾とし、対照的な空間の差異の水準と根拠から建築家の非均質的な空間認識の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 対照性の内容と形式

資料とした設計論からは、分析例(図1)のように作品において何を対比させているか(以下、対比対象)、およびどのような差異の水準で対比させているか(以下、差異の水準)を読み取ることができる。本章では、これらの内容について検討する。

2-1. 対比対象の分類と組合せ 対比対象は「外殻」、
「空間」、
「構成材」の3つに分類した。「空間」は部屋や中庭などの空間的に場を規定するものであり、最も多くみられた。「外殻」は外皮や外形のように建築全体の輪郭を規定するものである。「構成材」は壁、床のように建築を構成する部位に関するものである。またそれらの組合せを資料単位で検討した(図2)。

2-2. 対照性における差異の水準 次に、差異の水準を、
<実体>、
<意味>、
<機能>の3つの大枠で捉えた(図3)。
<実体>は建築のかたちなどの実体的な差異に関するものであり、《空間構成》、《部位配列》、《スケール》、《形態》、《色、素材》、《構造》に分類した。
<意味>は空間の象徴性やイメージの差異に関するものであり、《記号性》、《知覚性》に分類した。
<機能>は人の活動、状態や空間の用途に関するものであり、《活動》、《性能》に分類した。また、差異の水準は複数述べられる場合があり、これらには分析例のように論説中の文脈から差異の水準の階層性⁵⁾を見出すことができる。そこで

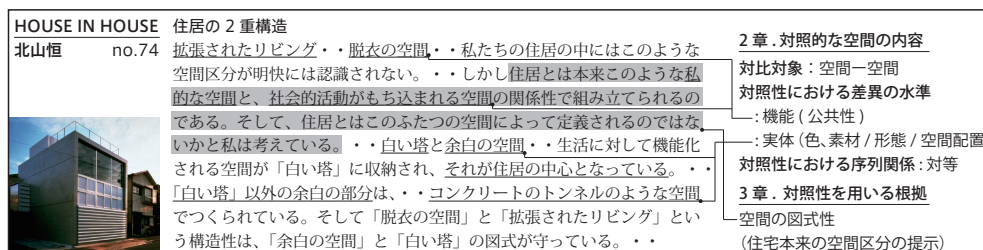


図1. 分析例

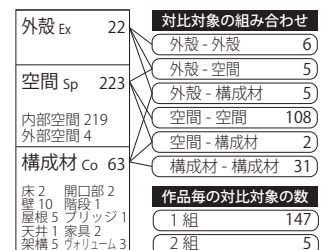


図2. 対比対象の分類と組み合わせ

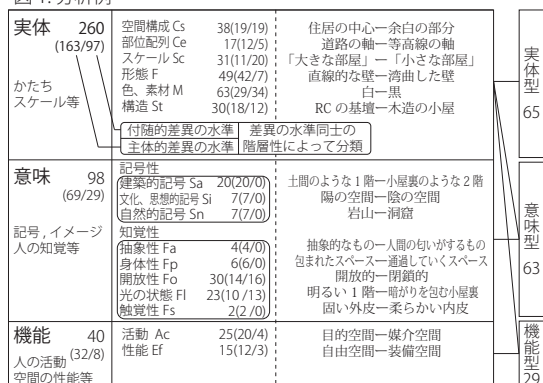


図3. 対照性における差異の水準

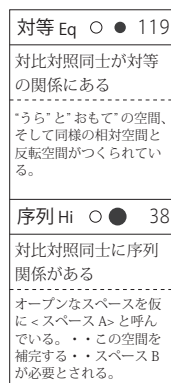


図4. 対照性における序列関係

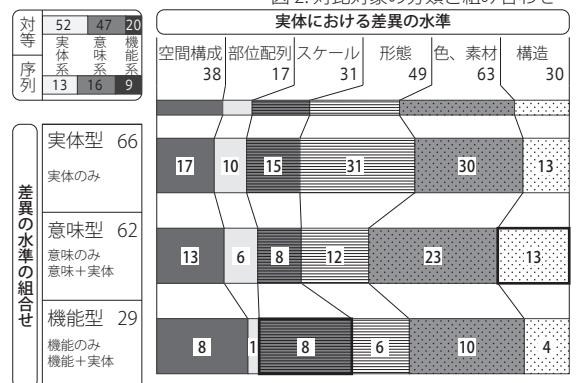


図5. 差異の水準の組合せと実体的な差異の水準

階層が上位のものを主体的差異として捉え、資料単位における差異の水準の組合せを主体的差異に着目し、『実体型』、『意味型』、『機能型』に分類した。2-3. 対照性における序列関係 論説中では対比対象同士の関係が読みとれ、これを「うら」と「おもて」(no.39)のように対等なもの[対等]と「スペースA・・・この空間を補完するスペースB」(no.44)のように序列のあるもの[序列]に分類した(図4)。

2-4. 差異の水準の組合せと実体的な差異の水準 大半の資料は<実体>を提示していたため、これと差異の水準の組合せとの関係を検討した(図5)。その結果、相対的に『意味型』では《構造》が多く、『機能型』では《空間構成》、《スケール》が多くみられた。ここから空間のイメージの差異は構造形式とともに、人の活動や空間の用途の差異は空間単位の操作や、その規模とともに思考されやすいと考えられる。

3. 対照性を用いる根拠

次に論説中から建築家が空間の対照性を用いる根拠を抽出し、KJ法により比較検討した(図6)。その結果、それらを[空間の表徴性]、[建築の場所性]、[空間の図式を提示]、[人、ものの状態]、[空間の現象性]

の5つのまとまりとして捉えた。[空間の表徴性]は民家や町屋といった具体的な建築形式や非日常性などの抽象的なイメージを建築へ投影することを根拠とするものである。[建築の場所性]は周辺環境との調和や周辺環境の顕在化など、建築と場所との関係を根拠とするものである。[空間の図式を提示]は普遍的な空間図式や機能性から自立した空間図式など、空間の関係図式を提示するものである。[人、ものの状態]は人の多様な活動、状態やものの存在の変容など、人やものの状態の操作を根拠とするものである。[空間の現象性]は空間体験の多様性や空間の連続性などの、空間の現象を根拠とするものである(以下各々[表徴]、[場所]、[図式]、[状態]、[現象])。さらにそれらが、空間の性格を明確化を根拠とするのか、曖昧化を根拠とするのかを読みとり、2つの大別した(以下【明確】、【曖昧】)。ここで根拠の内容を概観すると、[図式]は【明確】と【曖昧】を横断し、他のすべての根拠とも重なることから、対照性を用いる根拠は[図式]を基調としつつ、他の根拠と伴に思考することで、空間の性格を明確にするものと曖昧にするものという両極を形成しているといえる。

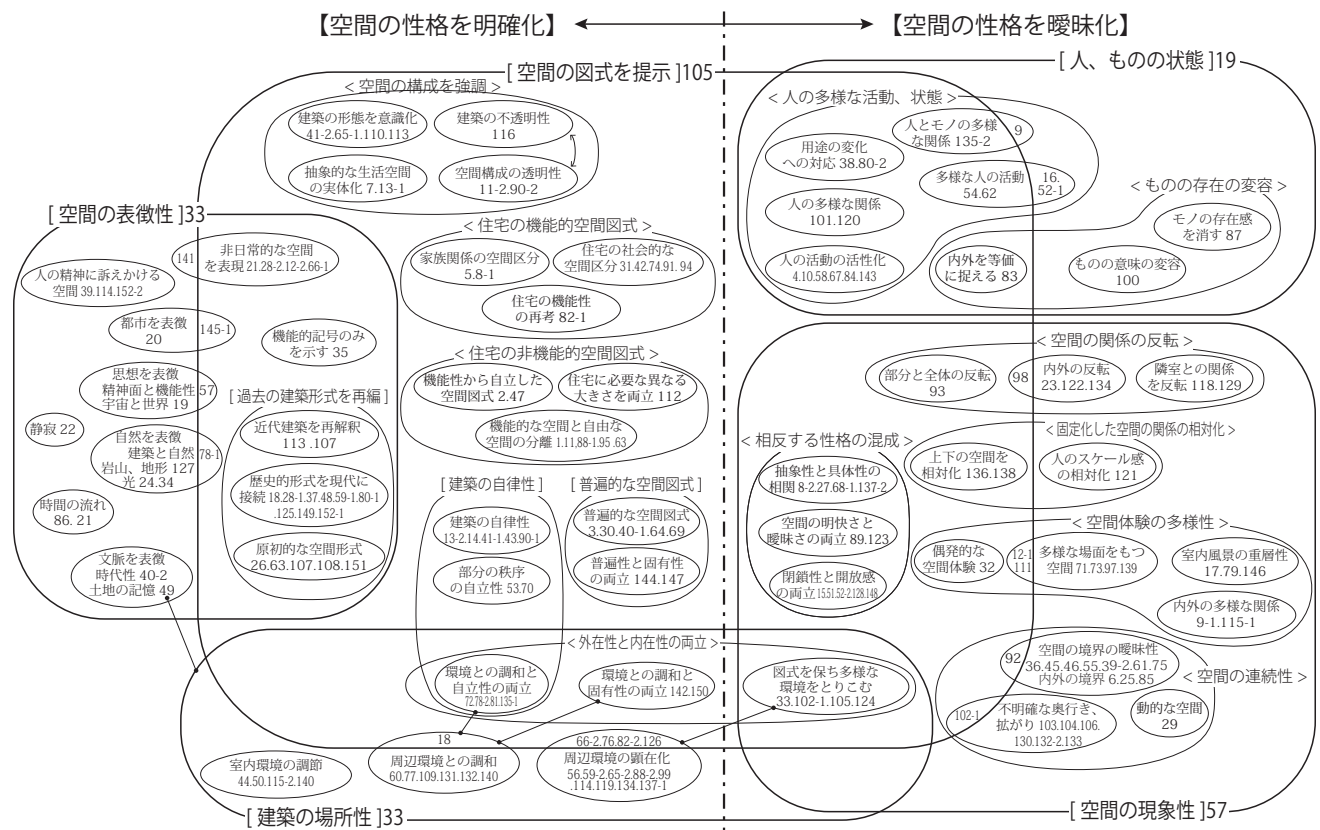


図6. 対照性を用いる根拠

4. 対照的な空間構想にみる非均質的な空間認識

2章で捉えた資料単位における差異の水準の組合せを横軸に、3章で捉えた対照性を用いる根拠を【明確】と【曖昧】で左右に分けて縦軸にとり、差異の水準の内訳と対比対象、階層関係の内訳を示した(図7)。まず、[図式]に着目すると『実体型』、『機能型』が多くみられた。ここから対照性による空間の形式化を一義的な根拠とする場合、かたちや色などの実体的な差異や、人の活動や空間の用途の差異といった具体的な水準における形式を重視する傾向にあると考えられる。具体的には閉じた箱と閉じた箱の残部や目的と対応する空間と対応しない空間などがみられた。また、序列関係の内訳をみると、『実体型』では[序列]が多く、これは対比する対象間の補完関係によって図式性をより明確化する思考を示していると考えられる。

次に[図式]と合わせて提示される根拠に着目すると、[図式]を除くすべての根拠に『意味型』が多くみられた。ここから、建築の表徴や場所との関係、現象性を対比による図式性によって構想する場合、実体的な水準だけでなく、概念的な水準においても空間の関係性を位置づける傾向にあるといえる。

さらに、それぞれの差異の水準の内訳を検討すると、[表徴]においては<実体>の《空間構成》と<意味>の《建築的記号》が多くみられた。また[場所]においては<意味>の《自然的記号》が比較的多くみられた。これは建築のイメージを対比による図式性によって構想する場合、イメージに関連する意味的な対比関係と合わせて、空間単位の間接関係を操作するが、建築と場所との関連を図式化する場合、記号性の対比のみによって捉える傾向にあるといえる。次に、[状態]は<実体>の《構造》が多くみられ、根拠の内訳は、「人の多様な活動、状態」であった。これは人の多様な活動を図式化する場合、空間の骨格の差異をつくる構造形式を思考対象とする傾向を示している。また、[現象]は<意味>の水準で《開放性》が比較的多かった。これは建築の現象的な側面を図式化する場合、建築の基本的な対比内容である内外の関係の形式を思考対象とする傾向を示している。これに加え、[状態]では『機能型』も多くみられた。これは対比的に人と空間の対応関係を図式化することで人の多様な活動、状態を構想するもの

である。

次に、単独で提示される図式を除く根拠に着目すると、いずれの根拠においても『実体型』が多くみられた。またその内訳をみると、<実体>の《形態》、《色、素材》が多くみられたが、[現象]においては[表徴]、[場所]に比べ、これらが《空間構成》や《部位配列》と合わせて提示されることが多かった。これは実体的な水準を基調として空間の差異を表現する場合、形態や色、素材を汎用的な差異表現としながら、空間の性格を明確化する場合空間の差異をかたちや色、素材などで直裁的に表すのに対し、空間の性格を曖昧化する場合空間単位や部位の構成に伴って表すことで、空間の輪郭や境界面の差異を複雑に表す傾向にあると考えられる。

この結果から、建築家は対照的な空間を図式的に捉え、空間の性格を明確にしようとする場合、対照性における空間の関係の形式化に着目するのに対し、曖昧にしようとする場合、対照性における相対立した要素の両義性に着目する。また対照的な空間を図式的に捉えず、空間の性格を明確化しようとする場合、単純に空間の差異を表現するのに対し、曖昧にしようとする場合、複雑に空間の差異を表現するという、対照性による非均質的な空間認識の差異を読みとることができる。

5. 結

以上、建築家の言説にみられる対照的な空間構想について、差異の水準と対照性を用いる根拠との関係から建築家の非均質的な空間認識について考察した。その結果、対比によって空間の性格を明確にするものと曖昧にするものの2つと、図式化によって空間の関係を明快に位置付けるものと、相対的に位置づけるものの2つを捉えた。ここには建築の形式性と非均質性を両立しようとする建築家の思考が反映されていると考えられる。

註) 1) 空間の対照性を言及しているものというのは、例えば、1階は大きな空間に対し、2階は小さな空間のように空間を特徴付ける言葉に対照性がみられるもののことをいう。

2) 本研究では建築家が具体的な空間をどのように構想しているかという点に着目しているため、そうした建築の修辭的側面⁹⁾がもっとも明快に表れていると思われる住宅作品を資料対象とする。

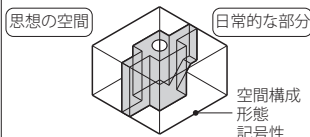
3) 資料は戦後から2017年までに出版された「新建築」誌、「新建築 住宅特集」誌において建築家が住宅の設計に際して著した設計論のうち、空間の対照性を読み取ることができる152の言説とした。

4) 修辭とは、一般に言語に関する表現の方法を意味するものだが、ここでは建築の構成法に関する表現を指している。

5) 差異の水準の階層性は分析例における「「脱衣の空間」と「拡張されたリビング」という構造性は、「余白の空間」と「白い塔」の図式が守っている。」のように差異の水準に優劣のあるものを指している。

- [空間の表徴性]/非日常的な空間表現

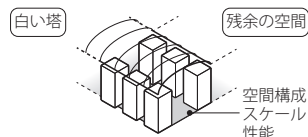
A no.12,1971/ 未完の家 / 篠原一男
[表徴][図式] x 「意味型」



日常性と非日常性との間に横たわる亀裂という問題を私にとっていつも基本的な問題として存在してきた。合理性が日常性ならば、非合理的なものを復権させ、非日常的空間を構築しよう。

— [空間の図式の提示] / 普遍的な空間図式

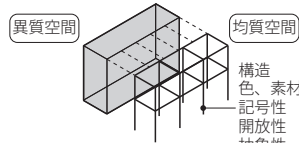
B no.64,1993/ 保谷本町のクリニック / 谷内田章夫
[図式] x 「機能型」



・等価のものを置換できる自由な構造性を建築に持たせようとするデザインの方向性が現象として表れたにすぎない。それだけ包括的で普遍的なもののありかたに私は強くひかれる。

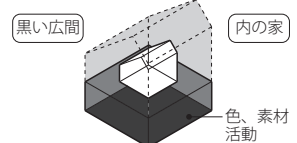
[人、ものの状態]/ 人の活動の活性化

E no.84,2000/ 武蔵野の家<内>と<ソト>の間Ⅷ/ 入江正之
[状態][図式] x 「意味型」



日常から非日常にいたるまでの生活行為が、・
展開する。柱・梁の架構やコンクリートのマッ
スの壁・開口はそれらのシーンの書割となる。・
対比をモチーフとする舞台の書割を介して、・
人々の動作・所作が生き生きとしたシーンを繰
り広げる。

F no.143,2013/ 内の家 / 坂牛卓
[状態][図式] x 「機能型」



なんとか「馴れない」建築、「活力を失わない」建築はできないものかと考えた。・・そこで建築の活力は建築それ自体からではなく、建築以外の何か、すなわち外部の環境や内部のアクティビティなどが、建築建築と作用して生み出されるのではないかと、

空間の性格を明確化 99

差異の水準 の組合せ	実体型 35	意味型 39	機能型 25

[illegible]空間の表徴性
31

空間の図式の提示 93

147	Cs	Sp	Sp	28-1	Cs	SIFI	94	Cs	Ac	Sp	Eq
7	CsMaT	Sp	Sp		Sp	Sp	64	CsMa	Eq	Sp	
144	CsMa	Hi	Hi		Hi	Hi	74	CsFT	Ac	Sp	Eq
13-1	CsF	Sp	Sp	41-1	Co	Co	2	Ac	Ac	Sp	Eq
90-2	CeT	Co	Co		Co	Eq	3	Ac	Eq	Sp	Eq
90-1	CeT	Co	Co	41-2	Co	Co	5	Ma	Eq	Sp	Hi
147	Mat	Sp	Sp	152-1	Mat	SaFI	82-1	Ma	Ac	Sp	Eq
112	FMaS	Sp	Sp		Sp	Sp	88-1	FMaT	Ac	Sp	Hi
113	FS	Ex	Sp	53	F	Sa	91	T	Ac	Sp	Eq
14	F	Co	Co		Sp	Sp	8-1	TS	Ac	Sp	Eq
65-1	FT	Sp	Sp	30	FIS	Sa	95	T	Ac	Sp	Eq
70	FT	Co	Co		Sp	Sp	42	S	Eq	Sp	Eq
110	T	Ex	Sp		Sp	Sp	11		Eq	Sp	Hi
116		Ex	Sp	15			31		Ac	Sp	Eq
							69		Ac	Sp	Eq

建築の場所性 30

[illegible]

空間の性格を曖昧化 76

実体型 36	意味型 32	機能型8	差異の水準 の組合せ
--------	--------	------	---------------

52-2 CsMaTS Sp-Sp Hi	87 T Co-Co Eq	16 TS Co-Co Eq	3	100 TS Sa Co-Co Eq	9 FI Sp-Sp Eq	2
----------------------	---------------	----------------	---	--------------------	---------------	---

人、ものの状態 19

[illegible]

「図式」上「状態」14

凡例

74 | CsFT | Pa | Sp-Sp | Eq — 序列関係

—— 資料 no. —— 対比対象

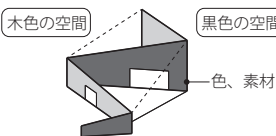
差異の水準 (実体 | 意味 | 機能)

差異の水準		対比対象	
実体 意味	空間構成 Cs	抽象性 Fa	空間・空間 SpSp
	部位配列 Ce	身体性 Fe	構成材 SpCo
	スケール Sc	開放性 Fo	空間・外殻 ExEx
	形態 F	光の状態 Fi	外殻・外殻 EPEx
	色、素材 M	光覚性 Fs	構成材・構成材 ExCo
構造 St		外殻・構成材 CoCo	
意味	建築的記号 Sa	序列関係	
	文化、思想的記号 Si	対等 Ee	
	自然的記号 Sn	序列 Hi	
		活動 Ac	
		性能 Ef	

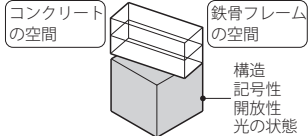
空間の現象性
57[illegible]

[建築の場所性] / 周辺環境を顕在化

C no.99,2004/ORU/ 六角美瑠
「場所」x「実体型」



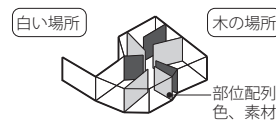
この土地を読み込み、表現するためのオリジナルな方法を考えたと思った。・・・この一枚の壁は、空間をつくり出すツールであると共に、私と敷地環境をつないでくれる存在となった。

D no.66,1995/ 熱海のアトリエ住居 / 室伏次郎
[場所] x 「意味型」

クライアントの選んだこの土地に、彼との協働によって混成的な一本の塔を建て、この地のランドスケープの意味を顕在化する・それは作家の生活の全時間のための容器としてふさわしいものとなるのではないかと考えた。

- [空間の現象性]/空間の連続性

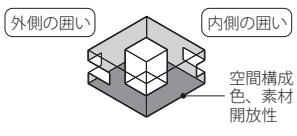
G no.104,2005/T house/ 藤本壮介
「現象」x「実体型」



空間のゆがみや抑揚によつて生まれる体験的、相対的な距離・・・「離れていて同時に繋がっている」「隣接しているが限りなく同時に繋がっている」といった、物理的にはあり得ないような、さまざまな豊かな距離感が実現するのである。

一[空間の現象性]/多様な空間体験

H no.124,2008/ 鎌倉の家 / 千葉学
「図式」[現象][場所] x 「意味型」



この開放と閉鎖の複合的な重なり合いは、住宅の中にさまざまな質をもった居場所をいくつも生み出す。きわめて原型的で形式性の強いプランニングでありながら、どこまでも柔らかく自由な空間である。

図 7. 対照性を用いる根拠と差異の水準の組合せ